熊本労災病院のホームページを訪れていただきありがとうございます。

黄金色の稲穂が刈られて、切り株が残る「たんぼ」も増えてきました。八代は、畳表に使われる、「い草」の一大産地です。子どもの頃、数年に一度、黄色くなった畳の表を、畳屋さんが来て鮮やかな手つきで張り替え、終わると家中がむせかえるような香りに満ちたことを覚えています。運動会になれば、みんな、い草でできた「ござ」をくるくる巻いて持っていき、グランドに広げて応援やお弁当を楽しんだものでした。畳は理想的な断熱保温材として、日本家屋の環境調整には重要な要素であり、実際、その利点が最近は見直されているそうです。また、い草の食物繊維に期待して飲み物や食用にも加工されています。木と畳で出来た日本家屋は、マンション住まいの私には今やあこがれですが、昨年の地震では、その弱さも明らかになりました。災害拠点病院の当院は当然耐震構造で避難先としても実際に使われましたが、ソフト面、すなわち職員の備えも十分でありつづける必要があります。先日は、院内での、地震を想定した災害訓練を行いました。看護学校の生徒さんにも御協力いただき、トリアージ（緊急性の分別）訓練も行いました。阪神淡路、東北、そして熊本と、地震の経験を経るにつれて、医療者一般のこのような訓練に対する態度は如実に変わってきています。労災病院は、昨年の地震の際にも職員一致して地域住民の避難と医療確保に奮迅の活躍をしました。労働者災害の治療から始まった労災病院の理念は、勤労者一般の疾病治療予防、そして今や、がんや心臓病、脳卒中といった疾病治療と就労の両立支援という機能を掲げ、災害時を含めたあらゆるシーンで命と健康を守る砦となっています。12 月 10 日には、八代市で両立支援に関する市民の皆様向けの講演会も予定されています。

労災病院では、一般的な診療に加えて、例えば、アレルギー外来のように、より細かいところに手が届く特殊専門外来も開設しており、担当の出口医師は、食に伴うアレルギーなどに関して保育園での講演活動も行うなど、地域に根ざした専門医療に邁進しております。これからも各専門領域の特色を活かした機能向上を図りたいと思います。さらに、患者さん用の図書情報コーナーの設置など、アメニティの充実も目指していく予定です。

八代圏域の医療資源は、市立病院の地震による入院機能の喪失など、なおその維持に不確定要素があります。熊本大学と協力しながら、医師の卵の皆さんを暖かい雰囲気の中で育成し、大きくなって八代に戻ってきていただく素地をつくる機能も労災病院に課せられた大きな意味と認識しております。地域の医師会の先生方や保健所を初めとした行政のご支援ご協力も得ながら、小児から妊婦さん、そして高齢者まで、あらゆる世代を対象に幅広い診療機能を備えて地域での砦の位置を保ち、また、研修医の育成を通して地域全体の医療資源を維持するためにさらに職員一丸となって精進する覚悟ですので、変わらぬご支援をよろしくお願いいたします。